

社会技術研究開発事業
令和5年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発
: 健康な「個立」を目指して」

太刀川 弘和
筑波大学 医学医療系 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	2
2-3. ロジックモデル	3
2-4. 実施内容・結果	4
2-5. 会議等の活動	17
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	17
4. 研究開発実施体制	17
5. 研究開発実施者	19
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	22
6-1. シンポジウム等	22
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	22
6-3. 論文発表	23
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	23
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	25
6-6. 知財出願	26

1. 研究開発プロジェクト名

社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発：健康的な「個立」を目指して

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

・スモールスタート期間の目標

社会的孤立・孤独についての定義を定め、孤立にかかわる顕在的・潜在的指標の開発にむけた概念の確立を目指す。同時並行して、孤立のために不可視化されたひきこもり者を調査し、前述の概念が臨床的に妥当かどうかを検証する。コロナ禍における、社会的孤立の深刻化のプロセスを質問紙・面接調査によって解明する。

・本格研究開発期間の目標

本格研究では、健康人を対象に社会的孤立化の心理的プロセスを実験的に検討する。その結果が、ひきこもり者や精神障害者に当てはまるかどうかを臨床的に検証する。

SNSの投稿データも解析し、孤独感の変容を検討する。

スモールスタート期間において得られた概念モデルから指標を開発し、例えば教育プログラム前後での指標評価などにより、PoCを実施する。さらに、心理的プロセスの検証から得られた知見を応用した介入プログラムと社会的孤立者のインタビューを踏まえたドラマ形式のメディア教材を開発し、地域住民への研修により実践をめざす。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

■総括グループ

Q1. 作成した孤立孤独予防教育・研修プログラムの教育効果は？

■精神医学グループ

Q1. ひきこもり支援者からみた支援の抑えておくべきポイントはあるか？

Q2. 笠間市の住民のひきこもりの現状がどうなっているか？（社会心理Gと共同）

■実験心理学グループ

Q1. ひきこもりへと至る社会的孤立のリスク評価を作成できるか？

Q2. 孤立傾向の高い人の認知的処理の特徴はどのようなものか？

■臨床心理学グループ

Q1. 孤立や孤独とは、どのような概念なのか？

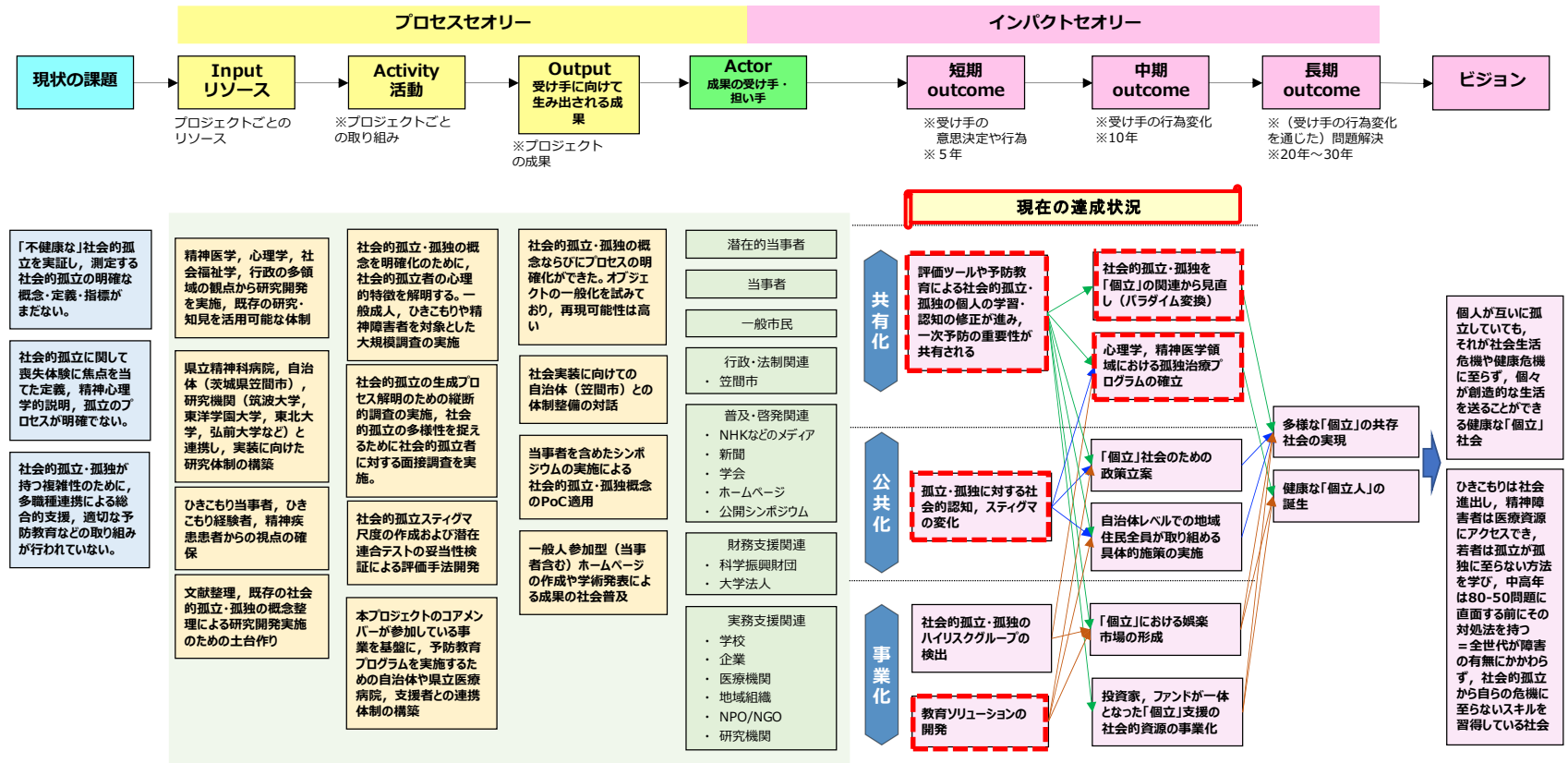
Q2. 社会的孤立に対するスティグマを軽減するために有効な介入とは？

■社会心理学グループ

Q1. 孤立の心理的反応やそのプロセス、コロナ禍での喪失体験の特徴、さらに孤立に至った経緯や要因とそれらの心理的反応にどのような関連があるのか？

2-3. ロジックモデル

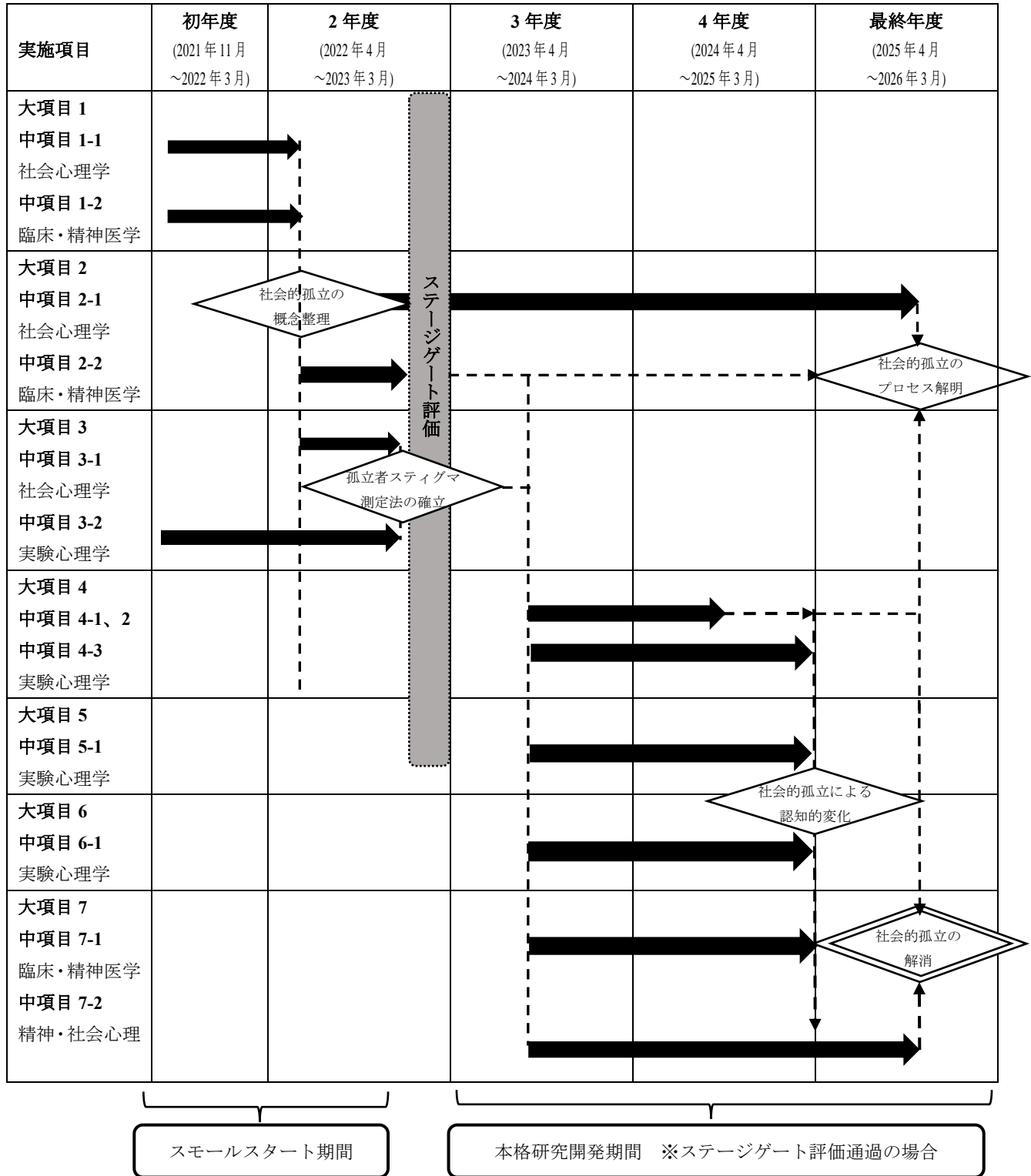
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)
 「社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発：健康な「個立」を目指して」ロジックモデル



2023年11月時点

2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



(2) 各実施内容

当該年度の到達点①

社会的孤立の概念整理のための大規模調査

実施項目①-2：社会的孤立の概念構造の解明

実施内容

社会的孤立の定義そのものが曖昧であることが、これまでの社会的孤立者の研究と支援を結びつける障壁の一つとなっていた。トップダウン的に社会的孤立を定義づけるよりも、ボトムアップ的な定義を目指すほうが、社会的孤立者の多様性を理解することができるだろう。そこで、曖昧な概念に対して「最良の例」を探索するプロトタイプ・アプローチ (Rosch, 1975) を導入することで、社会的孤立の概念的定義の確立を目指す。加えて他研究の統計データの二次解析を行い、コロナ禍の孤立孤独が人々に与えた影響を検討する。

期間：2021年11月～2022年3月31日 (リスクヘッジ用研究期間：2022年7月31日)

実施者：太刀川弘和 (《筑波大学》・《教授》)、小川貴史 (《こころの医療センター》)、白鳥裕貴 (《筑波大学》・《講師》)・菅原大地 (《筑波大学》・《助教》)

対象：実施項目①-1の調査に加えて、行政・福祉・医療機関の職員に対して社会的孤立者のイメージを尋ねる。そのイメージをリスト化して、各イメージの類似度を一般成人200名に回答してもらおう。また、他研究の統計データを使用し二次解析を行う。

当該年度の到達点②

社会的孤立者の心理的変遷の解明

実施項目②-1：孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯

実施内容

社会的孤立は、社会から居場所を失う「喪失体験」と捉えることができる。喪失体験後の心理的過程には否認、怒り、抑うつといった様々な反応が出現する。孤立という喪失体験における心理的反応やそのプロセス、コロナ禍での喪失体験の特徴、さらに孤立に至った経緯や要因とそれらの心理的反応にどのような関連があるのかを検証することで、社会的孤立のメカニズムの解明につながると考えられる。今回は、実施項目①-1で、社会的孤立状態にある回答者を対象に縦断的に複数回の調査を行う。さらに、SNSの投稿データを解析し、孤独感の変遷を検討する。

期間：2022年7月～2025年12月31日 (リスクヘッジ用研究期間：2026年3月31日)

実施者：相羽美幸 (《東洋学園大学》・《准教授》)・菅原大地 (《筑波大学》・《助教》)

対象：実施項目①-1の一般成人を対象とした調査において社会的孤立状態にある回答者を対象とする。対象者が少数の場合は、実施項目①-1の社会的孤立者の代替者のうち、縦断調査への承諾が得られた回答者も追加する。SNSの投稿データを縦断的に収集して、その変遷を検討する。

当該年度の到達点③

社会的孤立における認知的特性の検討

実施項目④-2：fMRIによる社会的孤立者の社会的情報処理傾向の検討

実施内容

社会的孤立によって他者との関わりが減少することで、脳機能にも影響が現れる可能性がある。例えば、表情認知においては、内側前頭前皮質と扁桃体と島が関わり、他者からの排斥は前部帯状回背側部の活動によって社会的な痛みとして表象される。したがって、社会的孤立者は、社会的情報の処理の基盤となる脳活動が非孤立者とは異なっている可能性がある。特に、他者との関わりから生じる不安などは、恐怖の条件づけに関連した神経回路の機能不全と関わることを示されている。そこで、扁桃体の活性化と社会的ステイグマの程度との関連をfMRIで計測し、社会的孤立に特有の脳活動を探る。

期間：2023年7月～2024年3月31日（リスクヘッジ用研究期間：2024年7月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：医療機関・クリニック等を利用する精神疾患患者10名と、ひきこもり、高齢者等10名、並びに一般成人10名である。

実施項目④-3：潜在連合テスト（IAT）による孤立者のステイグマの測定

実施内容

実施項目③-2によって作成した潜在連合テスト（IAT）を、実際の孤立者へ実施することで、本テストが社会的孤立に陥るリスクの評価として適切に機能するかを検討する。

期間：2022年9月～2025年3月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年7月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：医療機関・クリニック等を利用する精神疾患患者30名と、ひきこもり、高齢者30名、並びに一般成人30名である。

当該年度の到達点④

社会的排除による心理的反応の変化に関する実験的検討

実施項目⑤-1：社会的排除経験の積み重ねによる心理的変遷の検討

実施内容

社会的排斥経験の積み重ねによる心理的变化を実験操作に基づき捉えることで、より現実的に対応した孤立化のプロセスを明らかにすることを目的とする。孤立へ至るプロセスが明確になることで、より効果的な介入などにつながる可能性がある。仮想的な社会的孤立状態を作り出すため、サイバーボール課題（仮想空間におけるボール回し課題）による社会的排斥操作を行う。また、社会的排斥経験を積み重ねとして捉える視点を導入する際、より長期的なスパンで排斥のパターンを操作することが可能である。例えば、初回は平等にボールが回ってくるが、回を追うごとに徐々にボールが回ってこなくなり排斥が増えていく場合、逆に初めはほとんどボールが回ってこないものの、少しずつ自分にボールが回ってくる場合などが挙げられる。最終的に自分にボールが回ってくる回数を統一した場合であっても、排斥のパターンによって心理的変遷のプロセスや内容が異なる可能性が考えられる。

期間：2023年7月～2025年3月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年7月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：一般成人60名を対象とする。

当該年度の到達点⑤

潜在連合テスト (IAT) のアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

実施項目⑥-1：IATのアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

実施内容

社会的孤立の予防という観点からすると、孤立の社会的スティグマを自身へ内在化する兆候を鋭敏に検出する必要がある。特に、義務教育終了後に孤立によって外部からの存在が把握できなくなりやすい傾向を踏まえると、義務教育後期に属する比較的若年層へのアプローチが不可欠である。この点に関して、偏見などセンシティブな対象に関する測定に対して、高い検出力を備える潜在連合テストは極めて有力な手段となり得る。そこで、スティグマの内在化を測定する潜在連合テストを簡略化し、スマートフォン上で実施可能なアプリを開発する。スティグマを内在化する兆候が認められる場合には、適切な情報を提供可能になり社会的孤立の予防につながられる。

期間：2023年7月～2025年3月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年7月31日）

実施者：川上直秋（《筑波大学》・《准教授》）

対象：一般成人60名を対象とする。

当該年度の到達点⑥

社会的孤立解消に向けた社会実装研究

実施項目⑦-1：顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

実施内容

一連の研究により、社会的孤立者へのスティグマを顕在的な測定する尺度と、簡易に測定するアプリが開発される。セルフスティグマ低減につながる認知行動療法のプロセス変数（作用機序を説明する変数）について縦断調査を行う。そして、セルフスティグマ軽減に効果的なプロセス変数を変容させる認知行動療法の技法を選定し、オンライン上で介入ができるシステムを構築する。効果の検証については、次年度以降IATやアイトラッカーを用いた研究の成果を反映できるよう、システムの仕様に組み込む。

期間：2023年7月～2025年3月31日（リスクヘッジ用研究期間：2025年7月31日）

実施者：白鳥裕貴（《筑波大学》・《講師》）・菅原大地（《筑波大学》・《助教》）

対象：社会的孤立の予防として、社会的孤立のリスクが高まる前の年代（例：中学生、高校生）の者に介入をする。

実施項目⑦-2：社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な個立の実現

実施内容

世間一般の人が社会的孤立者に抱くスティグマと、社会的孤立者が地域社会に対して持つスティグマの両者を軽減させることで社会的孤立者が支援につながりやすくなり、

「健康な個立」を実現できる社会への変容を目指す。地域・社会レベルの社会的孤立者へのスティグマを軽減するために、スモールスタート期間に作成した「個立生活」ウェブサイトの継続運用に加え、孤立に悩む人の心理と社会的孤立が解消するまでのプロセスをまとめたメディアコンテンツを作成し、だれでも孤立に陥ることが理解されるような社会啓発活動を展開する。適切な情報資源にアクセスできるようにメディアリテラシーを向上させるための心理教育も実施する。加えて、スキルを学び、「ひとりであること」に対するスティグマの低減と「いきる力」の強化を目標とする孤立・孤独予防教育プログラムを開発

する。その際、教師やスクールカウンセラーも実施することができるようなプログラムや教材の開発を目標とすることで、継続的に実現可能な孤立・孤独予防教育プログラムを目指す。また、笠間市の住民を対象とした住民調査を実施し、住民の現状や支援ニーズの把握を行い、より適切な支援を可能とする「支援の最適化」について検討する。これらを踏まえ、笠間市をモデルとして自治体の相談窓口など市内の社会資源をわかりやすく紹介するリーフレット作成、市職員の孤立者への相談機能向上のグループ研修活動を行う。笠間市の保健福祉部およびソーシャルワーカーに協力を仰ぎながら実施する。本事業を展開させつつ、「孤立・孤独対策」という観点から、地域の対人援助職者のネットワークを構築することを目指す。

期間：2022年7月～2025年7月31日（リスクヘッジ用研究期間：2026年3月31日）

実施者：太刀川弘和（《筑波大学》・《教授》）白鳥裕貴（《筑波大学》・《講師》）・相羽美幸（《東洋学園大学》・《准教授》）

対象：孤立前の段階にある中学生、80-50問題に直面する前の中高年を対象とする。自治体の協力を得て、ひきこもりのリスクの高い個人を可能な限り組み入れる。

（3）成果

研究開発要素「①社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」についての研究開発結果・成果

本プロジェクトでは、社会的孤立・孤独メカニズムを理解するために、社会的孤立・孤独の概念を明確化することから始めた。そのために、一般成人、ひきこもり、精神障害者を対象に独自の大規模な調査を実施し、さらに他の大規模調査(JACSIS)のデータの二次解析を行って、社会的孤立者の心理的特徴の解明を試みた。その結果、精神障害者は社会的孤立や孤独のリスクが高いこと、COVID-19の蔓延に伴い、参加者全体で社会的孤立が増加する一方で、孤独感は必ずしも増加しないこと、孤独感は抑うつ症状を介さず直接的に自殺念慮と関連したことが示唆された。

続いて、社会的孤立の概念構造の解明を試みた研究では、社会的孤立者のタイプ分けを可能とする概念構造を確立し、社会的孤立・孤独の形態は多様であり、適応的な側面も不適応的な側面もあることが示された。また、研究者だけでなく、社会的孤立者の支援者が抱く包括的な社会的孤立者のイメージについても検討した。このことは、社会的孤立者研究・支援における研究者と実践者間の溝を埋めることにもつながると考えられる。

さらに、社会的孤立の生成プロセスを解明するための縦断的調査を実施しており、現在解析を進めている。また、社会的孤立に至った経緯やその深刻化のプロセスは複雑であり、その多様性を捉えるために社会的孤立者（本プロジェクトではひきこもり）、及び社会的孤立者への支援者に対する面接調査を実施した。これらの研究から、社会的孤立の生成プロセス・解消プロセスおよび統合的な社会的孤立の深刻化のプロセスが解明されると想定される。

一連の研究から、社会的に孤立している状況では、孤独を感じている人もいれば、そうではない人もいることが示され、社会的孤立・孤独の多様性が明らかになったといえる。これらの調査結果を公表し、社会全体で社会的孤立・孤独の多様性や社会的孤立に至るプロセスを理解することによって、社会的孤立・孤独が苦痛を生まない新たな社会像のさらなる抽出につながると考えられる。

研究開発要素「②人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」についての研究開発結果・成果

社会的孤立者が容易に社会復帰できず、支援にもつながりにくい要因として、社会的なスティグマが存在すると考えられる。この社会的スティグマを測定するために、大規模調査の回答や、ひきこもりのインタビュー結果を参考に、4側面×7項目の計28項目から成る社会的孤立者に対するスティグマ尺度を作成した。さらに、スティグマを自身へ内在化しているかについて検討するために、潜在連合テストの開発と妥当性の評価を試みている。現時点での主な結果として、潜在的孤立スティグマが高く潜在的自尊感情が低い場合、他の群と比較して、幸福感が低く、孤独感と抑うつ傾向が高いことが明らかとなっている。

以上の研究により、社会的孤立者に対するスティグマ尺度では、社会的孤立に対するスティグマを簡易に測定することが可能となり、潜在連合テストでは社会的孤立者の顕在的・潜在的なスティグマを測定するツールとなる。これらのツールは、本格研究期間における介入研究での活用を想定している。

研究開発要素「③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」についての研究開発結果・成果

本プロジェクトでは、発足時から精神医学、心理学、社会福祉学、行政の多領域の観点から研究開発を推進することが可能な体制を整えており、週1回の頻度で開催している社会的孤立・孤独についての勉強会や定期的な研究会議によって、プロジェクトメンバー間の共通認識や協働体制をさらに綿密なものにしている。

また、本プロジェクトのコアメンバーはすでに笠間市市民を対象とした自殺予防対策事業、ひきこもり支援事業を実施しており、プロジェクトを推進していくための基本的な研究体制を構築していた。当該年度は、新たに中学生を対象とする社会的孤立・孤独の予防教育プログラム（e-BOCCHI：ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる教育）を開発した。同プログラムは実際に笠間市内の中学校二校及び埼玉県春日部市の中学校一校の中学2年生に授業を実施し、一定の教育効果をあげることができた。

さらに今年度は、笠間市の住民を対象とした「地域で孤立している方々に対する支援方法に関するアンケート調査」と題した住民調査を実施し、各種ひきこもり基準での市内の社会的孤立者の人数推計を行った。精神医学グループでは、ひきこもり当事者への支援を行う一般社団法人、行政の職員3名へ支援のニーズ等をインタビュー形式で実施をした。

当該年度の到達点①

社会的孤立の概念整理のための大規模調査

実施項目①-2：社会的孤立の概念構造の解明

成果（論文）：

- ① Tachikawa H, Matsushima M, Midorikawa H, Aiba M, Okubo R, Tabuchi T: Impact of loneliness on suicidal ideation during the COVID-19 pandemic: findings from a cross-sectional online survey in Japan. BMJ Open. 2023 May

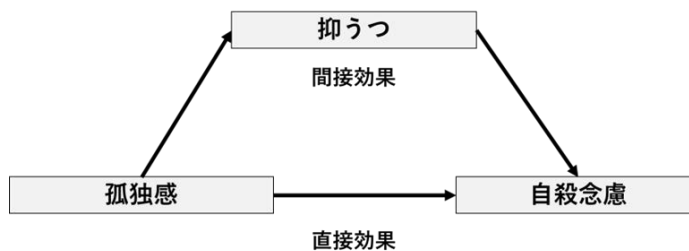
15:13(5):e063363. doi: 10.1136/bmjopen-2022-063363.

【内容】

- 26,000人の全国アンケート調査データ(JACSIS)を用いて、コロナ禍における自殺慮に対する社会的孤立、孤独感、うつ状態の影響度を分析した。
- 対象の15-16%が自殺念慮をもち、パンデミックで2割増加をした。
- 経済苦境や社会的孤立よりも孤独感が直接的に、またうつ状態を介して間接的にも、自殺念慮に強い影響を与えることが明らかになった。

自殺念慮の危険因子	モデル1(-抑うつ状態)		モデル2(+抑うつ状態)	
	男性	女性	男性	女性
孤独感	4.83***	6.19***	3.60***	4.33***
社会的孤立	1.03	1.05	1.03	0.98
抑うつ状態			2.30***	2.75***
COVID-19の感染	1.61***	1.36**	1.61***	1.29**
コロナ禍による収入減	1.28**	1.26**	1.23**	1.20*
生活苦	2.09***	1.68***	1.80***	1.50***

コロナ禍の自殺念慮の危険因子モデル (縮約表)

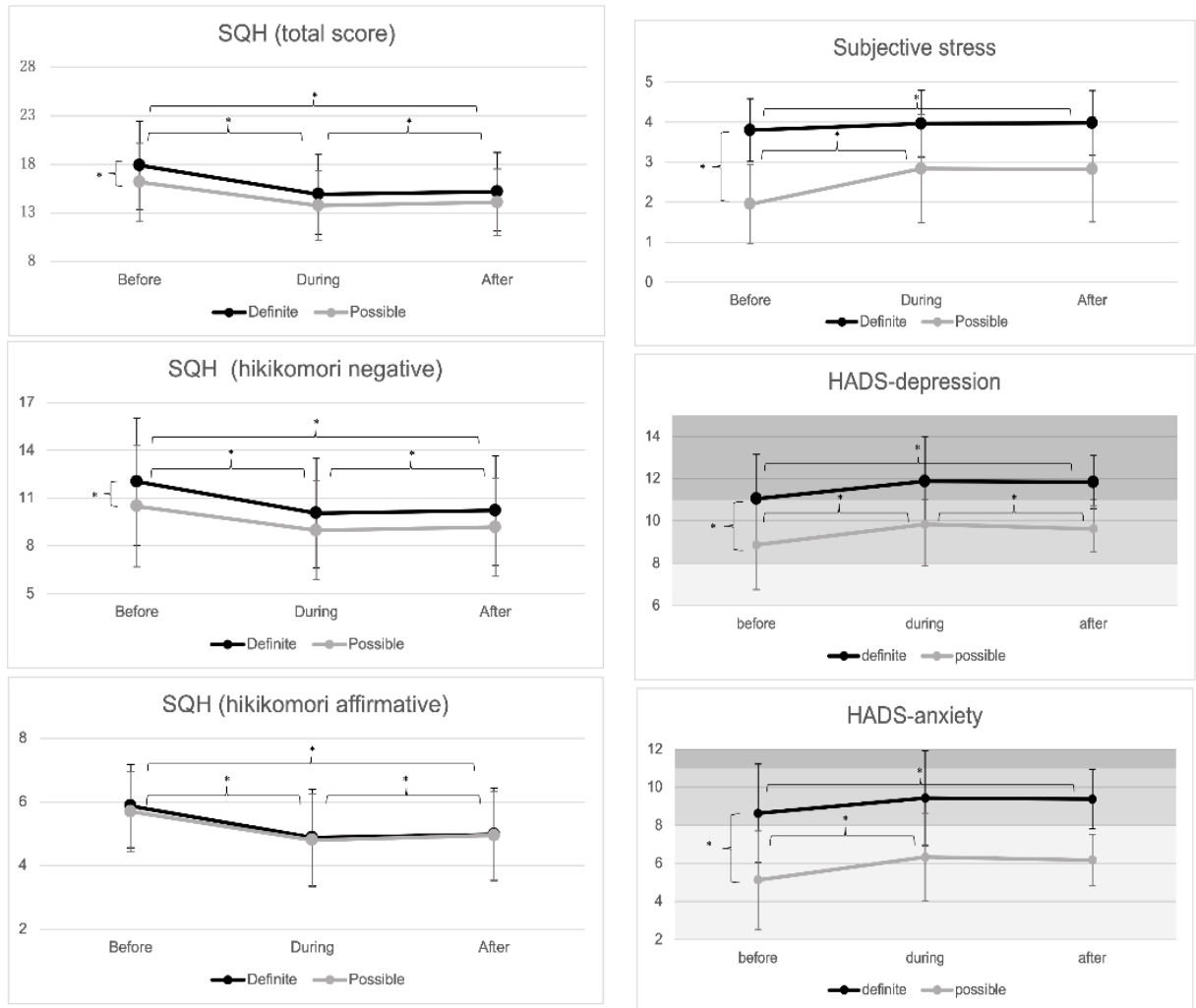


孤独感、抑うつ状態、自殺念慮の媒介関係の模式図

- ② Ogawa T, Shiratori Y, Midorikawa H, Aiba M, Sugawara D, Kawakami N, Arai T, Tachikawa H.:A Survey of Changes in the Psychological State of Individuals with Social Withdrawal (hikikomori) in the Context of the COVID Pandemic COVID 2023, 3, 1158–1172. <https://doi.org/10.3390/covid3080082>

【内容】

- 緊急事態宣言で全国民がひきこもり類似状態になり、ひきこもり者のメンタルヘルスが逆説的に改善したか後方視的に3時点の心理尺度変化を検証した。
- 緊急事態宣言中、ひきこもり者が感じるスティグマは改善したが、メンタルヘルスは悪化した。
- ひきこもり者のメンタルヘルスは、スティグマの軽減や適応的対処戦略だけで改善はできず、重症では治療的介入も必要である。



コロナ前中後3群・ひきこもり2群（確定群・疑い群）で抑うつ・不安・スティグマを比較（二元配置分散分析）

当該年度の到達点②

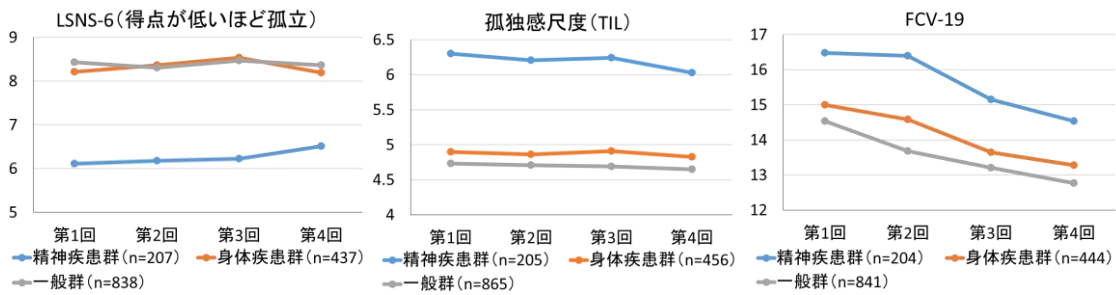
社会的孤立者の心理的変遷の解明

実施項目②-1：孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯

成果

縦断調査の第4回調査を2023年9月、第5回調査を2024年3月に実施した。第4回調査時点での継続回答者は1,549名（継続回答率45%）であった。精神疾患群、身体疾患群、一般群の4時点の社会的孤立と孤独感、コロナ恐怖の変化を検証した結果、社会的孤立には変化がなかったが、孤独感とコロナ恐怖は4時点で有意に減少していた（下図参照）。第5回調査については、今後解析していく予定である。

X（旧ツイッター）において、孤独に関連するツイートを2023年11月～2024年4月に収集した。66,782件のツイートのデータを収集し、今後解析していく予定である。



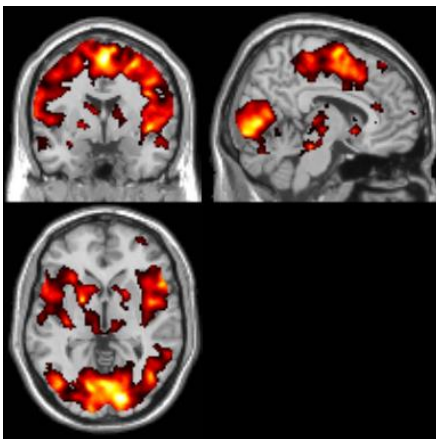
当該年度の到達点③

社会的孤立における認知的特性の検討

実施項目④-2：fMRIによる社会的孤立者の社会的情報処理傾向の検討

成果

一般成人18名を対象に、産業技術総合研究所のMRI設備を用いて実験を行った。実験では、操作的に社会的孤立状況を再現するためにサイバーボール課題を行わせ、その最中の脳の賦活について検討した。その結果、社会的な関係性の崩壊に伴う痛みに関与するとされる前帯状皮質背側部と、痛みの制御に関与するとされる右腹外側前頭前皮質の有意な賦活が確認された(下図参照)。このことから、社会的孤立経験が社会的痛みとして脳内で賦活する一方で、それに対処するための脳部位も賦活し、バランスを保っている可能性が示唆された。今後は、各種心理指標と脳活動との関連の解析を進め、より詳細なプロセスを検討する。



実施項目④-3：潜在連合テスト (IAT) による孤立者のスティグマの測定

成果

これまでの成果から、IATによって社会的孤立に至る潜在的なリスク評価が作成可能であることが明らかとなっていたが、IATのブロック順序による効果量の差、回答者の負担など、診断的な方法として導入するためには課題が残されていた。そこで、これらの課題を解決するためにIATをアレンジし、いくつかの可能性を探った。具体的には、順序効果の抑制のため、回答者ごとにブロック順序をランダム化せず固定化する方法、負担軽減の

ための試行数の削減などを行い、現在評価を行っている。

当該年度の到達点④

社会的排除による心理的反応の変化に関する実験的検討

実施項目⑤-1：社会的排除経験の積み重ねによる心理的変遷の検討

成果

社会的排斥経験の積み重ねによる心理的变化を実験操作に基づき捉える可能性として、サイバーボール課題を繰り返す方法について予備的な検討を行った。具体的には、サイバーボール課題を3つのブロックに分け、最初のブロックではPCの故障という名目で回答者が参加せずに排斥されるのを観察するブロック、続くブロックでは回答者も参加するもののボールが回って来ない排斥ブロック、最後にほかの参加者と同回数ボールが回ってくる受容ブロックを作成した。その妥当性の検証については現在も進行中であるが、アイトラッカーで課題中の視線データを取得し、それぞれのブロックで特徴的な認知的処理を明らかとする方向で考えている。

当該年度の到達点⑤

潜在連合テスト (IAT) のアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

実施項目⑥-1：IATのアプリ化による社会的孤立の兆候の早期発見プログラムの開発

成果

実施項目④-3で記載の通り、現在、より簡便で正確なリスク評価が可能なIATを作成するために研究を進めている。

実施項目④-3：潜在連合テスト (IAT) による孤立者のスティグマの測定

成果

現在開発途上のため、実施には至っていない。しかし、実施済みのデータ分析から、孤立傾向とIATによるスティグマの強度において関連が見られており、引き続き実施に向け検討を進める。

当該年度の到達点⑥

社会的孤立解消に向けた社会実装研究

実施項目⑦-1：顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

成果

当該年度は、顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法をオンラインで提供するためのアプリケーションと、セルフヘルプ型（自分だけで体験できる）認知行動療法の動画を作成した。通常用いられる認知行動療法の技法に加えて、援助要請に関する心理教育動画も作成した。さらに、4,200名を対象に3つの縦断調査を行い、セルフスティグマを軽減するために有用なプロセス変数（たとえば、感情制御）を検討した。本調査の結果を踏まえて、セルフスティグマを軽減するための介入プログラムをブラッシュアップしていく。

実施項目⑦-2：社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な個立の実現 成果

社会的孤立・孤独の予防教育プログラム「ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる教育：education for Boosting Communication and Confidence for Healthy Independence (e-BOCCHI, イーボッチ)」を当該年度に開発した。この授業は「1回目：ひとりぼっちでいることについて、いろいろな考え方を学ぶ」、「2回目：ゆるやかな人間関係の大切さを知り、その作り方を学ぶ」、3回目「ひとりでも楽しい過ごし方、相談できる場所SOSの出し方を学ぶ」の全3回で構成されており、授業を通じて「ひとりでも前向きな考え方ができ、いざとなったら助けを求められる」ことを全体の目標としている。このプログラムを実際に、茨城県笠間市の中学校二校及び埼玉県春日部市の中学校一校へ授業実施した。授業実施前後の心理尺度を比較をすると、孤独感と抑うつは減少し、援助要請と自尊感情は増加し、一定の教育効果をあげることができた。

また、笠間市の住民を対象とした「地域で孤立している方々に対する支援方法に関するアンケート調査」と題した住民調査を実施した。年代別人口構成比割付によって抽出した20代～80代の4000名を対象に、郵送による笠間市住民アンケート調査を実施した結果、1144名（男性517名、女性627名）の有効回答が得られた（有効回答率28.6%）。ウェイトバック集計を行い、笠間市住民のひきこもりの人数を推計した結果、笠間市の成人人口62,383人あたり、精神科基準のひきこもりは5,096人（人口の8.17%）、内閣府基準2広義のひきこもりは4,239人（人口の6.79%）、内閣府基準2狭義のひきこもりは2,485人（人口の3.98%）と推定されることがわかった。いずれの基準でも全国平均を上回っており、ひきこもりに対する早急な対策が必要であることがわかった。

さらに、新たなひきこもり支援方法のヒントを得るために、ひきこもり当事者への支援を行う一般社団法人と行政に所属する3名の支援者へ支援ニーズ等を尋ねるインタビュー調査を実施した。次年度は、住民調査の結果をより詳細に分析し、支援の在り方をインタビュー調査結果と併せて検討する。

（4）プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

■総括グループ

Q1. 作成した孤立孤独予防教育・研修プログラムの教育効果は？

e-BOCCHIプログラムを開発し、茨城県笠間市及び埼玉県春日部市内の中学校三校の中学2年生に実施することができた。授業実施前後で比較をすると、孤独感と抑うつは減少し、援助要請と自尊感情は増加した。今後は社会実装を広めるために以前に作成をしたホームページを活用し広く周知していく。また今回の授業プログラムの結果を論文にまとめ、公表をする予定である。

■精神医学グループ

Q1. ひきこもり支援者からみた支援の抑えておくべきポイントはあるか？

ひきこもり当事者への支援者へのインタビューを現在まとめている段階ではあるが、手紙を介してのやりとりや、相手と会えない場合はYSEかNOかで答えられる質問紙を入れておく等があげられている。

Q2. 笠間市の住民のひきこもりの現状がどうなっているか？

笠間市住民調査のデータからウェイトバック集計を行い、笠間市住民のひきこもりの人数を推計した結果、笠間市の成人人口62,383人あたり、精神科基準のひきこもりは5,096人（人口の8.17%）、内閣府基準2広義のひきこもりは4,239人（人口の6.79%）、内閣府基準2狭義のひきこもりは2,485人（人口の3.98%）と推定されることがわかった。いずれの基準でも推計人数は多く、社会的孤立に対する早急な対策が必要であることがわかった。来年度は結果の解析をより詳しく行い、笠間市の実態とニーズを分析し共同実施者である笠間市の施策に提言をしていく予定である。

■実験心理学グループ

Q1. ひきこもりへと至る社会的孤立のリスク評価を作成できるか？

今年度まで成果を鑑みると、IATによってひきこもりへと至る社会的孤立のリスク評価を作成できると想定されるが、社会実装するに当たってはブロック順序や実施の手間など改善が必要な部分も多い。

Q2. 孤立傾向の高い人の認知的処理の特徴はどのようなものか？

fMRIにより社会的排斥を経験することで、社会的痛みを感じる部位が賦活することが示され、孤立の出発点がネガティブな経験として処理される可能性が認められた。しかし、それと同時に、社会的痛みに対処するための部位を賦活することで、ネガティブな経験を脳内で適切に処理するというプロセスの可能性が示された。今後は、このプロセスにどのような個人差があるか、心理指標との関連を探っていく必要がある。

■臨床心理学グループ

Q1. 孤立や孤独とは、どのような概念なのか？

これまで実施した調査研究を踏まえると、孤立や孤独（孤独感）は類似した概念ではあるが、1人でいることが必ずしも不適応にはつながらない「孤高」といった概念や、無理やり物理的に離された「隔絶」、1人で生活をしている「单身」といった概念に区別されることがわかった。少なくとも、孤立・孤独（孤独感）は不適応を表す単一の概念ではなく、適応・不適応といった次元を有する概念であることがわかった。

Q2. 社会的孤立に対するスティグマを軽減するために有効な介入とは？

縦断調査によって、アクセプタンス&コミットメントセラピーにおけるプロセス変数である心理的柔軟性が、社会的孤立に対するスティグマの軽減に有効である可能性がわかってきた。興味深いところに、関係流動性や面子が社会的孤立に対するスティグマと関連することもわかってきており、関係流動性や面子といった心理社会的なアプローチも有効であることがわかってきた。

■社会心理学グループ

Q1. 孤立の心理的反応やそのプロセス、コロナ禍での喪失体験の特徴、さらに孤立に至った経緯や要因とそれらの心理的反応にどのような関連があるのか？

ポストコロナとなり、全体的に孤独感とコロナ恐怖が減少した。ただし、精神疾患のあ

る者は依然として身体疾患のある者や一般の者に比べて孤立や孤独感が高く、重度の社会的孤立に陥るリスクが高いことがわかった。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

■総括グループ

孤立孤独予防教育プログラムを作成することができたが、広く周知する方法を現在検討中である。またプログラムの結果の論文化を迅速に進めたい。

■精神医学グループ

調査は予定通り進んでおり、来年度は大規模調査データの解析が主となる予定である。その成果を元に論文執筆を進めたい。

■実験心理学グループ

当初の予定より遅れている。具体的にはスティグマを測定するIATの作成について、ブロック順序の影響など想定外の要因が出てきたため、改善と再度のデータ取得などが繰り返し必要となっている。また、MRIによる実験においても当初の予定は60名ほどの参加者を予定していたが、技術者の退職などの環境的要因により20名弱程度のデータにとどまっている。よりスピーディーかつ効率的な研究実施のため、研究開発実施者の見直し・増員などを予定している。

■臨床心理学グループ

当初の予定よりも多くの研究（縦断調査やSNS）ができているものの、研究成果については学会発表にとどまっている。来年度は非常勤研究員を雇用することによって、論文執筆に専念し、論文の掲載を目指す。

■社会心理学グループ

調査の実施は予定どおり進んでいるが、データ分析や論文執筆が遅れている。人員確保が難しいため、他グループとも協力して迅速に論文化を進めたい。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2023年4月～ 2024年3月 (計25回)	勉強会	オンライン	進捗報告、相談等
2023年8月、10月、 2024年3月 (計3回)	進捗報告会議	オンライン	各グループの進捗報告

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

■総括グループ

茨城県笠間市教育委員会の協力のもと、笠間市、埼玉県春日部市の三校の中学二年生に対して、孤立孤独予防教育プログラムを実施できた。プログラムで用いる地域の相談窓口リーフレットを笠間市社会福祉課と作成できた。授業実施はNHKテレビなど複数のメディアで報じられ、一定の反響を得た。笠間市教育長にも評価され、次年度は市内の残り4つの中学校に実施することになった。またプログラムは試行的に弘前大学において小児科通院中の患者に実施されるなど派生的に利用されている。

4. 研究開発実施体制

(1) 総括グループ

① 太刀川 弘和、筑波大学 医学医療系、教授

② 実施項目：実施項目1～7の総括（スモールスタート期間・本格研究期間）

グループの役割の説明：本グループにおいては、本プロジェクトに関わる全体会議主催、すべての研究実施項目の進捗管理、研究員の統括、行政機関との連携体制の構築を行う。本プロジェクトでは大きく4つのグループがあるが、各グループの研究知見のとりまとめと学術的評価を行う。各グループの成果を元に、介入研究で使用する孤立孤独予防教育プログラムの制作・実際に学校でのプログラムの実施を行う。

(2) 精神医学グループ

① 白鳥 裕貴、筑波大学 医学医療系、講師

② 実施項目：

(スモールスタート期間)

・社会的孤立の概念構造の解明

(本格研究開発期間)

・顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

・社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な孤立の実現
グループの役割の説明：本グループにおいては、完全な孤立の一步手前の状態として、ひきこもり当事者や精神障害者に対してアウトリーチを含めた介入・インタビューを実施し、質的調査を通じて社会的孤立の概念構造の解明を行う。またひきこもり支援者へのインタビューを実施し、支援の在り方を検討する。笠間市住民を対象とした孤立に関する住民調査を実施し、ひきこもりの実態調査を行う。

(3) 実験心理学グループ

① 川上 直秋、筑波大学 人間系、准教授

② 実施項目：

(スモールスタート期間)

・潜在連合テスト (IAT) によるスティグマの内在化の検討

(本格研究開発期間)

・アイトラッカーによる社会的孤立者の視覚的情報処理特性の検討

・fMRIによる社会的孤立者の社会的情報処理傾向の検討

・社会的排斥経験の積み重ねによる心理的変遷の検討

・潜在連合テストによるスティグマ測定のアプリ実装

グループの役割の説明：本グループにおいては、IAT、アイトラッカーなどの非言語的指標の使用を通して、「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」に取り組む。また、仮想的な社会的排斥操作を行うことで、排斥から孤立に至るプロセスの検討を行う。

(4) 臨床心理学グループ

① 菅原 大地、筑波大学 人間系、助教

② 実施項目：

(スモールスタート期間)

・社会的孤立の概念構造の解明

・社会的孤立の代替モデルを対象とした社会的孤立深刻化のプロセスの解明

(本格研究開発期間)

・顕在・潜在的スティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

グループの役割の説明：各グループの知見を統合し、社会的孤立という概念的定義に取り組む。また、心理面接の技術を活かして、ひきこもりや精神疾患患者に対する面接調査と、SNSの投稿データを解析し、社会的孤立の深刻化のプロセスを検討する。さらに、顕在・潜在的スティグマを軽減させる心理教育および認知行動療法を実施する。

(5) 社会心理学グループ

① 相羽 美幸、東洋学園大学 人間科学部、准教授

② 実施項目：

(スモールスタート期間)

・社会的孤立者の心理的特徴の解明

・孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯

- ・社会的孤立のスティグマ尺度の作成
(本格研究開発期間)
 - ・社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な孤立の実現
- グループの役割の説明：本グループにおいては、一般成人に対する大規模調査を通して、量的研究の側面から社会的孤立の概念的定義や孤立の心理的変遷の解明に取り組む。また、社会的孤立のスティグマ尺度を作成し、スティグマ軽減の効果測定 of 指標を提供するとともに、パブリックスティグマ軽減の効果測定を行う。

5. 研究開発実施者

総括グループ（リーダー氏名：太刀川 弘和）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
太刀川 弘和	タチカワ ヒロカズ	筑波大学	医学医療系	教授
下条 かをる	シモジョウ カオル	笠間市役所	保健福祉部	部長
斎藤 環	サイトウ タマキ	筑波大学	医学医療系	教授
堀 孝文	ホリ タカフミ	茨城県立こころの医療センター		病院長
高木 善史	タカギ ヨシフミ	岩手県立大学	社会福祉学部	講師
矢口 知絵	ヤグチ チエ	筑波大学	医学医療系	非常勤研究員
櫛引 夏歩	クシビキ ナツホ	弘前大学	医学部	助教
石塚 里沙	イシヅカ リサ	春日部市立飯沼中学校		養護教諭
齋藤 真衣子	サイトウ マイコ	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	M1

精神医学グループ (リーダー氏名：白鳥 裕貴)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
白鳥 裕貴	シラトリ ユウキ	筑波大学	医学医療系	講師
翠川 晴彦	ミドリカワ ハルヒコ	筑波大学 附属病院	精神神経科	病院講師
小川 貴史	オガワ タカフミ	茨城県立こころの医 療センター		医師
小松崎 智恵	コマツザキ チエ	茨城県立こころの医 療センター		医師
田口 高也	タグチ タカヤ	茨城県立こころの医 療センター		医師

実験心理学グループ (リーダー氏名：川上 直秋)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
川上 直秋	カワカミ ナオアキ	筑波大学	人間系	准教授
荒井 崇史	アライ タカシ	東北大学	文学研究科	准教授
金子 侑生	カネコ ユウキ	東北大学	文学研究科	D2

臨床心理学グループ (リーダー氏名：菅原 大地)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
菅原 大地	スガワラ ダイチ	筑波大学	人間系	助教
佐藤 洋輔	サトウ ヨウスケ	埼玉学園大学	心理学科	専任講師
八斗 啓悟	ハット ケイゴ	筑波大学大学院	人間総合科学研究科	M2

松本 彩花	マツモト アヤカ	筑波大学大学院	人間総合科学研究科	M2
宮崎 珠緒	ミヤザキ タマオ	福岡県立大学大学院	心理学類	M1
茂木 麻由	モギ マユ	筑波大学大学院	人間総合科学研究群	M1

社会心理学グループ (リーダー氏名：相羽 美幸)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
相羽 美幸	アイバ ミユキ	東洋学園大学	人間科学部	准教授
古村 健太郎	コムラ ケンタロウ	弘前大学	人文社会科学部	准教授

研究開発の協力者・関与者

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	協力内容
担当者		笠間市保健福祉部		現場との連携調整
担当者 (中村・成島)		茨城県立こころの医療 センター		現場との連携調整
Masood Zangeneh		Humber College、 School of Liberal Arts and Sciences	教授	調査研究に関する助言、協力
Richard Isralowitz		Ben Gurion University of the Negev、 Director of the Regional Alcohol and Drug Abuse Research (RADAR) Center	教授	調査研究に関する助言、協力

Vladimir Carli		Karolinska Institutet、 Division for Suicide Research and Prevention of Mental Ill-Health Centre	講師	介入研究に関する助言、協力
----------------	--	--	----	---------------

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ① 太刀川弘和、高橋あすみ（監訳）、メディアと自殺：研究・理論・政策の国際的視点、Thomas Niederkrotenthaler and Steven Stack: Media and Suicide. 人文書院、京都、2023
- ② 太刀川 弘和、こども・若者の自殺予防、令和4年度福島県医師会メンタルヘルスシンポジウム報告「子供（若い人）の自殺問題を考える～だれも自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して」、福島県医師会報 85（5）、2023年5月号, p67-81.

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・「個立生活」 <https://koritsu-life.jp/>、2023年1月23日

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ① 太刀川 弘和、石塚里沙、思春期の子どもの心と向き合う、茨城県教育研修センター研修会（笠間）、2023年7月19日
- ② 太刀川 弘和、思春期のメンタルヘルス、茨城県立水戸第一高校教職員研修会（水戸）、2023年8月25日
- ③ 太刀川弘和、石塚里沙、子どもの心と向き合う、笠間市ゲートキーパー研修会（笠間）、2024年2月3日

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (4 件)

●国内誌 (1 件)

- ① 太刀川 弘和、マスクとワクチン—自殺と報道の関係について—、精神神経学雑誌125 (11) : 974-981, 2023.11

●国際誌 (2 件)

- ① Tachikawa H, Matsushima M, Midorikawa H, Aiba M, Okubo R, Tabuchi T: Impact of loneliness on suicidal ideation during the COVID-19 pandemic: findings from a cross-sectional online survey in Japan. BMJ Open. 2023 May 15;13(5):e063363. doi: 10.1136/bmjopen-2022-063363.
- ② Ogawa T, Shiratori Y, Midorikawa H, Aiba M, Sugawara D, Kawakami N, Arai T, Tachikawa H.: A Survey of Changes in the Psychological State of Individuals with Social Withdrawal (hikikomori) in the Context of the COVID Pandemic COVID 2023, 3, 1158–1172. <https://doi.org/10.3390/covid3080082>

(2) 査読なし (1 件)

- ① 太刀川 弘和、孤独を防ぐSNSの効果とリスク、心と社会 54 (2) No.192 : 45-51, 2023.5

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 1 件、国際会議 0 件)

- ・ 榎引夏歩 (弘前大学) 「孤立・孤独という社会課題にどう向き合うか? ~直面する課題に立ち向かう現場×研究による予防的アプローチ~」オンライン実施.2024年1月24日

(2) 口頭発表 (国内会議 5 件、国際会議 0 件)

- ① 太刀川弘和 (筑波大学) 「未成年の自殺の実態と予防介入のあり方—つながりと学びの視点から— 未成年の自殺をめぐる課題と対策~実態・予防・介入・事後対応」第20回日本うつ病学会総会 シンポジウム11 (仙台) 2023年7月21日-22日
- ② 相羽美幸 (東洋学園大学) 「孤立・孤独問題に対する公衆衛生学的アプローチ 話題提供 孤立・孤独の社会調査」第82回日本公衆衛生学会総会 シンポジウム55、つくば国際会議場、2023年11月2日
- ③ 翠川晴彦 (筑波大学) 「孤立・孤独問題に対する公衆衛生学的アプローチ 話題提供 孤立・孤独への心理社会的アプローチ」第82回日本公衆衛生学会総会 シンポジウム55、つくば国際会議場、2023年11月2日
- ④ 太刀川弘和 (筑波大学)、「孤立・孤独問題に対する公衆衛生学的アプローチ 話題提供 孤立・孤独の概念整理」第82回日本公衆衛生学会総会 シンポジウム55、つくば国際会議場、2023年11月2日
- ⑤ 榎引夏歩 (弘前大学)、菅原大地 (筑波大学)、石塚里沙 (春日部市立飯沼中学)

校)、矢口知絵(筑波大学)、高木善史(岩手県立大学)、翠川晴彦(筑波大学)、小川貴史(こころの医療センター)、上月ゆり子(こころの医療センター)、米澤慎二郎(こころの医療センター)、齋藤真衣子(筑波大学)、相羽美幸(東洋学園大学)、白鳥裕貴(筑波大学)、川上直秋(筑波大学)、中村哲也(こころの医療センター)、堀孝文(こころの医療センター)、太刀川弘和(筑波大学)。中学生に対する社会的孤立・孤独の予防に焦点を当てた心理教育プログラムの開発。第42回日本社会精神医学会、東北医科薬科大学小松島キャンパス、2024年3月14日

(3) ポスター発表 (国内会議 1 件、国際会議 11 件)

- ① Matsumoto A(University of Tsukuba), Aiba M(Toyo Gakuen University), Sugawara D(University of Tsukuba), Shiratori Y(University of Tsukuba), Kawakami N(University of Tsukuba), Hatto K(University of Tsukuba), Komura K (Hirosaki University), Kushibiki N (Hirosaki University), Midorikawa H(University of Tsukuba), & Tachikawa H(University of Tsukuba) . 「Examination of the clinical picture of social isolation using network analysis. 」 10th World Congress of Cognitive and Behavioral Therapies 2023, COEX Seoul, June 2 2023
- ② 翠川晴彦(筑波大学)、相羽美幸(東洋学園大学)、古村健太郎(弘前大学)、榎引夏歩(弘前大学)、菅原大地(筑波大学)、川上直秋(筑波大学)、白鳥裕貴(筑波大学)、太刀川弘和(筑波大学)：ひきこもり傾向に関連する心理的特性-社会的孤立・孤独に関するオンラインアンケート調査結果より、第119回日本精神神経学会、パシフィコ横浜、2023年6月22日
- ③ 白鳥裕貴(筑波大学)、小川貴史(筑波大学)、太田深秀(筑波大学)、袖山紀子(筑波大学)、新井哲明(筑波大学)、太刀川弘和(筑波大学)：Covid-19流行時の留学生のメンタルヘルスについて、第119回日本精神神経学会学術総会、パシフィコ横浜、2023年6月24日
- ④ 石川玲(筑波大学)、太刀川弘和(筑波大学)、翠川晴彦(筑波大学)、田淵貴大(大阪国際がんセンターがん対策センター)、自分および同居家族のコロナ罹患経験とコロナ恐怖の関連、第20回日本うつ病学会総会、仙台、2023年7月21日-22日
- ⑤ 相羽美幸(東洋学園大学)、古村健太郎(弘前大学)、川上直秋(筑波大学)、菅原大地(筑波大学)、白鳥裕貴(筑波大学)、榎引夏歩(弘前大学)、翠川晴彦(筑波大学)、太刀川弘和(筑波大学)。社会的孤立者に対するスティグマ尺度の作成。日本社会心理学会第64回大会、上智大学四谷キャンパス、2023年9月7日
- ⑥ 古村健太郎(弘前大学)、相羽美幸(東洋学園大学)、菅原大地(筑波大学)、翠川晴彦(筑波大学)、榎引夏歩(弘前大学)、白鳥裕貴(筑波大学)、川上直秋(筑波大学)、太刀川弘和(筑波大学)。サポートネットワークと孤独感から捉える社会的孤立。日本社会心理学会第64回大会、上智大学四谷キャンパス、2023年9月7日
- ⑦ 榎引夏歩(弘前大学)、相羽美幸(東洋学園大学)、菅原大地(筑波大学)、翠川晴彦(筑波大学)、古村健太郎(弘前大学)、白鳥裕貴(筑波大学)、川上直秋(筑波大学)、太刀川弘和(筑波大学)、自己愛傾向とひきこもりの関連における

援助要請の調整効果の検討. 日本パーソナリティ心理学会第32回大会、2023年9月10日

- ⑧ 菅原大地（筑波大学）、松本彩花（筑波大学）、八斗啓悟（筑波大学）、櫛引夏歩（弘前大学）、相羽美幸（東洋学園大学）、佐藤洋輔（埼玉学園大学）、白鳥裕貴（筑波大学）、川上直秋（筑波大学）、翠川晴彦（筑波大学附属病院）、太刀川弘和（筑波大学）、孤立・孤独関連概念の構造. 日本心理学会第87回大会、神戸国際会議場、神戸国際展示場、2023年9月16日
- ⑨ 相羽美幸（東洋学園大学）、古村健太郎（弘前大学）、川上直秋（筑波大学）、菅原大地（筑波大学）、白鳥裕貴（筑波大学）、櫛引夏歩（弘前大学）、翠川晴彦（筑波大学）、太刀川弘和（筑波大学）. ソーシャル・サポートと社会的孤立者に対するスティグマが孤独感とうつに及ぼす影響. 第47回日本自殺予防学会総会、J:COM ホルトホール大分、2023年9月16日
- ⑩ 石塚里沙（春日部市立飯沼中学校）、櫛引夏歩（弘前大学）、矢口知絵（筑波大学）、菅原大地（筑波大学）、相羽美幸（東洋学園大学）、白鳥裕貴（筑波大学）、川上直秋（筑波大学）、中村哲也（こころの医療センター）、堀孝文（こころの医療センター）、太刀川弘和（筑波大学）. 中学生向け孤立・孤独予防教育プログラムの地域実装に向けた自治体との連携のプロセスと課題. 第47回日本自殺予防学会総会、J:COM ホルトホール大分、2023年9月16日
- ⑪ 安宅勝弘（東京工業大学 保健管理センター）、太刀川弘和（筑波大学）、布施泰子（茨城大学 保健管理センター）、茨木丈博（東京工業大学 保健管理センター）、丸谷俊之（お茶の水女子大学 保健管理センター）、高橋あすみ（北星学園大学）、石井映美（早稲田大学 保健センター）、小田原俊成（横浜市立大学 保険管理センター）、河西千秋（札幌医科大学）、公立・私立大学を対象とした死亡学生実態調査－第2報：2022年度データを中心に－、第61回全国大学保健管理研究集会、石川、2023年10月4日-5日
- ⑫ 石塚里沙（春日部市立飯沼中学校）、櫛引夏歩（弘前大学）、高橋あすみ（北星学園大学）、矢口知絵（筑波大学）、齋藤真衣子（筑波大学）、菅原大地（筑波大学）、相羽美幸（東洋学園大学）、白鳥裕貴（筑波大学）、川上直秋（筑波大学）、太刀川弘和（筑波大学）、埼玉県内の小中学校における「自殺予防に向けた教育」に関する教員の実態調査、第42回日本社会精神医学会、仙台、2024年3月14日-15日

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (2 件)

- ① 太刀川弘和、松島みどり、コロナ禍では、孤独感が日本人の自殺念慮に強い影響を与えた、筑波大学プレス発表、2023年5月17日
- ② 松島みどり、太刀川弘和、コロナ禍で自殺者増 孤独感対策が不可欠 特集 Hello! 先端研究、筑波大学新聞、2023年11月1日号 (379)、2023.

(2) 受賞 (0 件)

(3) テレビ・ラジオ (9 件)

- ① 太刀川 弘和、改めて 自殺報道の在り方を考える、ABEMA TV 「ABEMA Prime」、2023年7月7日
- ② 太刀川 弘和、「どんなことでも相談窓口に…」子どもの自殺どう防ぐ?夏休み明け前に考える、ABEMA TV 「ABEMA Prime」、2023年8月21日
- ③ 太刀川 弘和、Lucky FM 茨城放送「CONNECT」、2023年9月12日
- ④ 太刀川 弘和、Lucky FM 茨城放送「CONNECT」、2023年9月27日
- ⑤ 太刀川 弘和、Lucky FM 茨城放送「CONNECT」、2023年9月28日
- ⑥ 太刀川 弘和、Lucky FM 茨城放送「CONNECT」、2023年10月6日
- ⑦ 太刀川 弘和、旬な人に聴きたい!「私が私であるために メンタルヘルスをめぐって」、Lucky FM 茨城放送「週刊ニュースポ」、2023年11月18日
- ⑧ 石塚里沙、生徒の孤独に向き合う、NHK 首都圏ネットワーク、2023年12月5日
- ⑨ 石塚里沙、生徒の孤独に向き合う、NHK 首都圏ネットワーク、2024年1月9日

6-6. 知財出願

- (1) 国内出願 (0 件)
- (2) 海外出願 (0 件)